

【資料紹介】

神奈川県立歴史博物館所蔵の

縄文時代前期貝塚出土動物遺体

―横浜市上台遺跡住居址内貝塚ブロックサンプルの分析―

吉 永 亜紀子
(日本動物考古学会)
千葉 毅

【キーワード】

上台遺跡 住居址内貝塚 動物遺体 貝製品 縄文時代前期

【要旨】

神奈川県立歴史博物館が所蔵する横浜市上台遺跡住居址内貝塚のブロックサンプルの分析報告を行なった。このサンプルは一九七六年に神奈川県立博物館が発掘調査した際に採集したものである。

出土動物遺体の定量的内容を明らかにし、当該地域の出土動物遺体データの追加を図るとともに、本遺跡の生業活動における貝類資源利用のあり方を検討した。

出土貝類種は計十三種、古鶴見湾湾口部という立地を反映した組成であった。ハマグリが八四%を占め、採貝活動領域は本遺跡周辺にあったと考えられる。主体的に採集されたハマグリは食料だけでなく貝製品の材料として利用されていたことが明らかとなった。貝刃において打ち欠きを特徴とする資料群、磨耗貝器がまとまって出土した点はほとんど類例がなく注目値する。

はじめに

神奈川県立歴史博物館の前身である神奈川県立博物館（以下、両者とも当館とする）では、一九六七年の開館から二〇年間ほど、地域研究の一環として県内各地での発掘調査を実施してきた。これまでに行なわれた発掘調査は八遺跡で十九回にわたり、調査結果は『神奈川県立博物館発掘調査報告』（第一号～第十九号）にまとめられている。

これらの調査は、大規模な発掘調査がそれほど多くなかった時期に行なわれたこともあり、その成果は当時の学界に少なからず影響を与えてきた。ただ、報告された資料は調査で得られた全資料のうち、ごく一部に留まっているものも多く、さらに未報告資料の中には今日的な視点で重要な情報を含んでいるものも少なくない。現在、当館ではこのような状況に鑑み、これまでに当館が実施した発掘調査資料の再整理を行なっているところである。

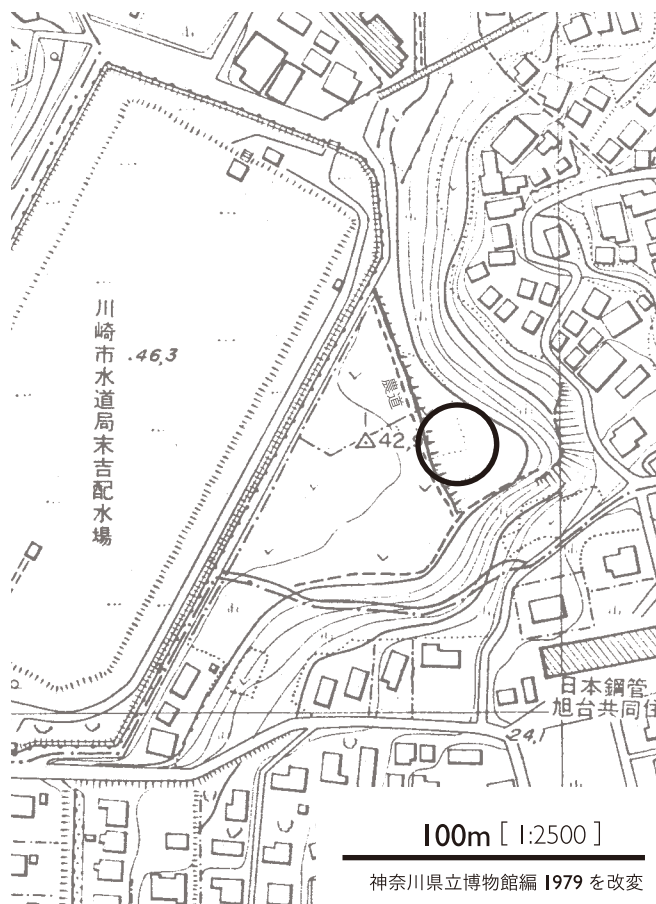
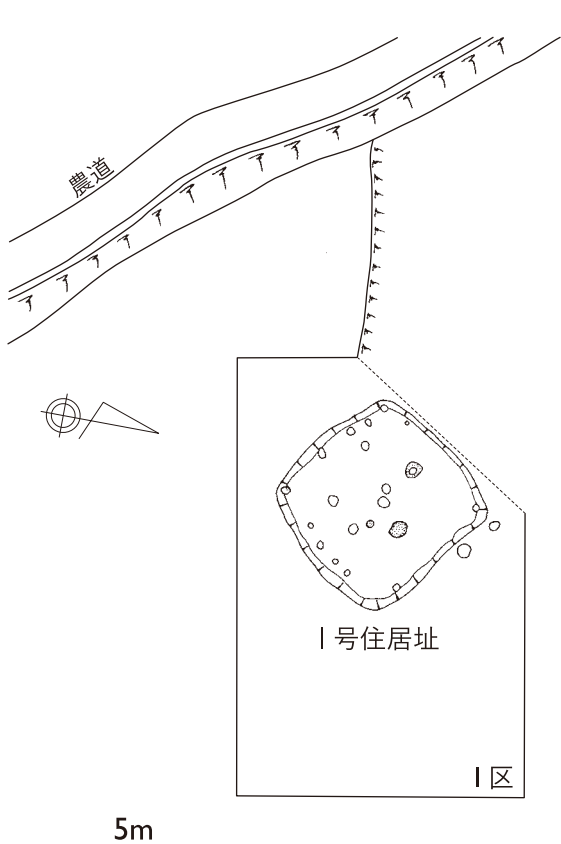
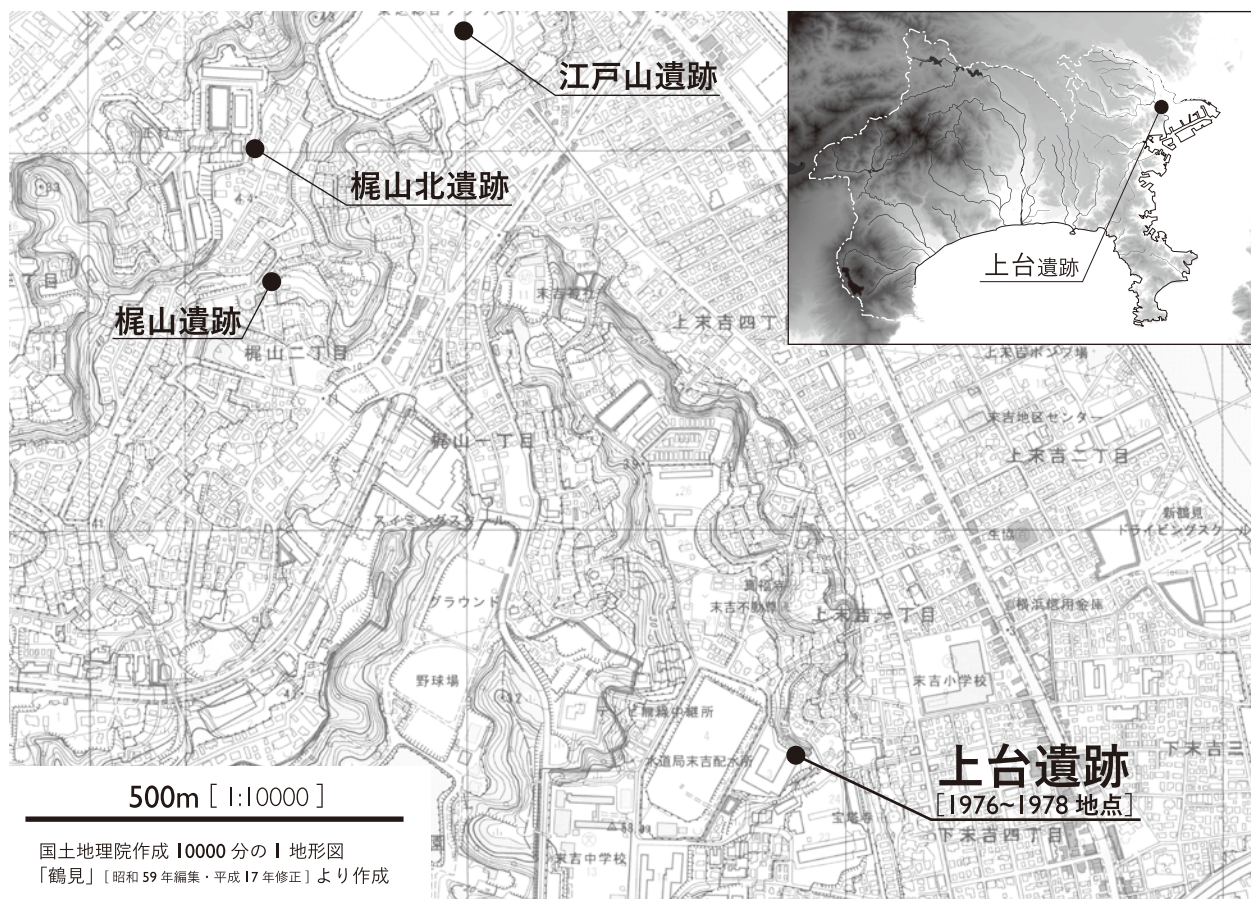
本稿では、一九七六年に実施された横浜市上台遺跡^{かみだい}の発掘調査の際に採取された貝層ブロックサンプルの分析を行なったので以下に報告する。
(千葉)

一 横浜市上台遺跡および分析対象資料について

(1) 上台遺跡および神奈川県立博物館による発掘調査の概要

上台遺跡は、横浜市鶴見区上末吉に所在する縄文時代早期・前期、弥生時代後期～古墳時代前期を主体とする遺跡である。下末吉台地先端の標高四十二m程度の台地上に位置し、鶴見川からは現状で四〇〇～五〇〇m程の距離にある（第1図）。

遺跡は台地上に広く展開すると考えられており、これまでに当館が実



第 1 図 上台遺跡の位置および調査区配置図

施した発掘調査をはじめとしていくらかの調査が実施されている（神奈川県立博物館編一九七七・一九七九、上台遺跡調査団編一九九九、玉川文化財研究所編二〇〇七）。当館の実施した調査は三次にわたっており（第一次が一九七六年、第二次が一九七七年、第三次が一九七八年）、調査目的は、第一次が縄文時代前期黒浜式期の貝層を伴う住居址の調査、第二・三次はそれに加え、第一次調査の際に出土した夏島式土器に関する知見を得るためのものであった。設定された調査区は第一次調査のものが1区、第二・三次調査で設定された区画が2区とされた。

本稿では、当館が実施した第一次調査の際に採取された貝層ブロックサンプルを対象とし分析を行なう。

（千葉）

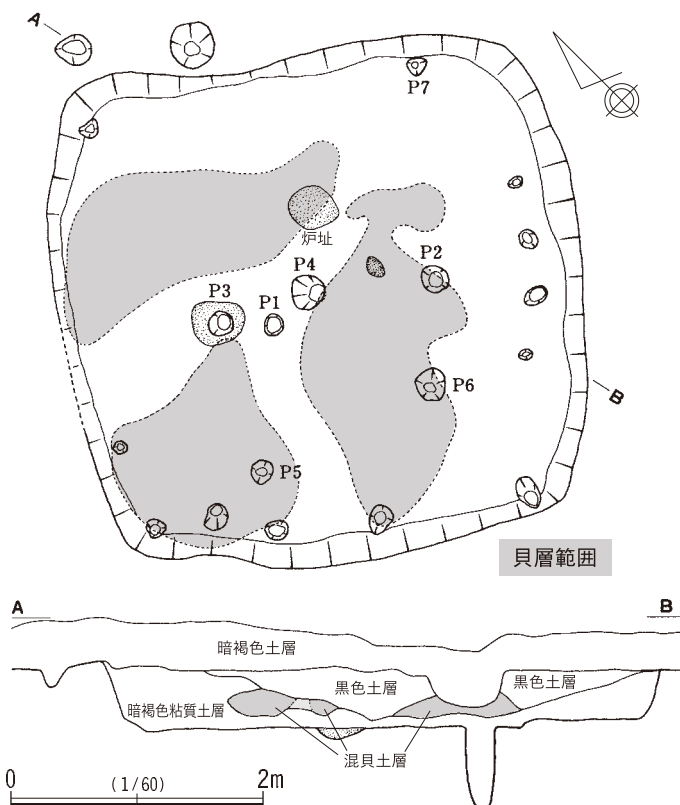
（2）住居址について

一九七六年の調査では、縄文時代前期黒浜式期の竪穴住居址が一基検出された（一号住居址、第2図）。住居址は三・九m×四・一mの不整形を呈する小型の竪穴住居址である。炉址は住居中央のやや北東にあり、灰と焼土の厚さは中央で一〇cmである。P2およびP3付近にも部分的に焼土が認められているが、それらは灰まじりの焼土が二次的に散乱したもののらしい。覆土は下から暗褐色粘質土層、混土貝層、黒色土層に区分されており、混貝土層は平面的に大きく三つの範囲に分かれる。三つの範囲とも住居址の西側に偏っていることから、「貝殻の投棄が西側から行われたことを示す」（神奈川県立博物館編一九七九）とされた。遺物は混土貝層および黒色土層から多く出土した。

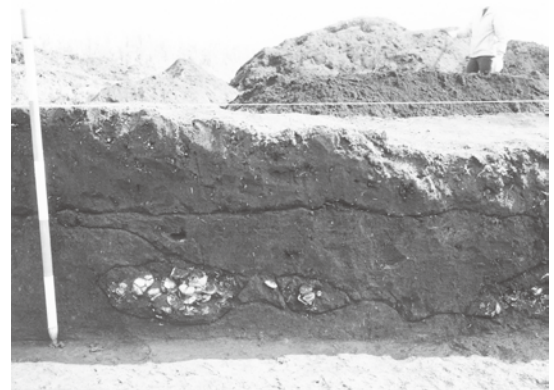
（千葉）

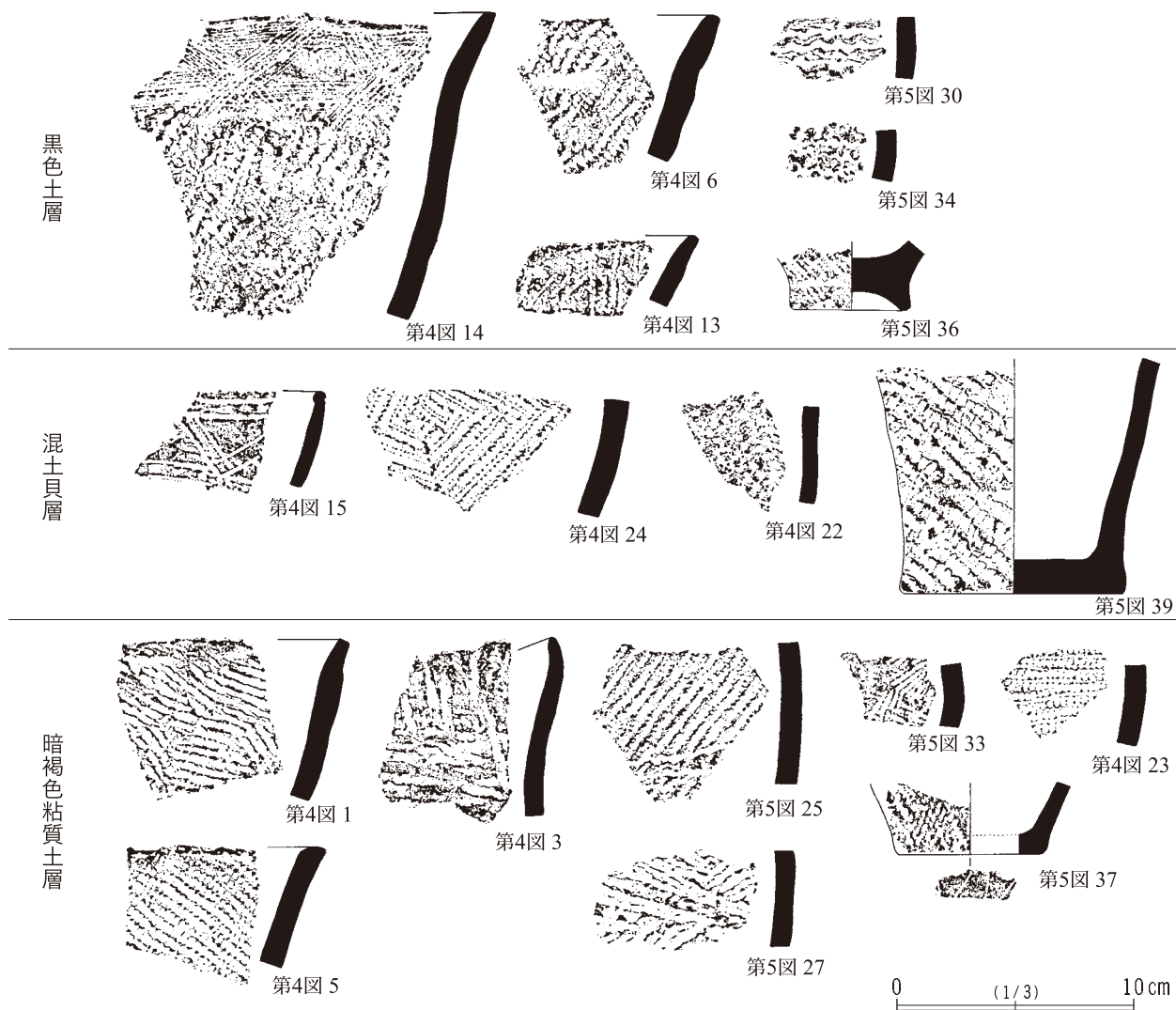
（3）貝層ブロックサンプルについて

本稿では前述の住居址から採取された貝層ブロックサンプルを分析対



第2図 上台遺跡1号住居址と住居址内貝層
（神奈川県立博物館編1979を改変）





第3図 上台遺跡1号住居址出土土器
(神奈川県立博物館編 1979 を改変、番号は引用元のものを示した)



第4図 黒浜式期の想定海岸線と上台遺跡
(神奈川県立生命の星・地球博物館編 2004 を改変)

象とする。ただ、このサンプルの採取位置は調査時の記録に残されておらず不明である。

出土した土器は、下層の暗褐色粘質土層から上層の黒色土層まで、黒浜2式土器を主体とし、他型式は混在しない(第3図)。このことから、覆土および貝層の形成された時期についても、黒浜式期の短期間に形成されたと考えられる。

なお、黒浜式期の暦年較正年代は六四〇〇～五九〇〇cal BPと考えられており(工藤二〇一二)、温暖な気候(PG Warm-2の末期)に伴ういわゆる縄文海進の最盛期にあたる。復元された六〇〇〇年前の海岸線を参照すると(神奈川県立生命の星・地球博物館編二〇〇四)、上台遺跡は東京湾を眼前に臨むとともに、古鶴見湾湾口部の台地先端に位置していたことが分かる(第4図)。

(千葉)

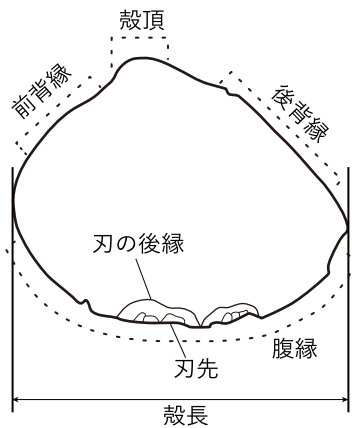
二 出土貝類遺体の内容

(1) 分析資料と方法

本稿で分析対象とするのは、第二次調査において採集された住居址内貝層ブロックサンプル、整理用コンテナにして約五箱分の貝類遺体である。既報には、調査時に獣骨・魚骨の出土にも注意が払われたが出土していないとの記述がある（神奈川県立博物館編一九七九）。本分析においても精査したが貝類以外の動物遺体は確認出来なかった。

出土貝類遺体は同定後、腹足綱は殻軸部が遺存する個体を一個体として計数、最小個体数 (MNI) とした。二枚貝綱は殻頂部が遺存する個体を一個体として計数、左右で多い方を最少個体数とした。出土点数の少ない二枚貝は貝合わせも行い、最小個体数を算出した。破片資料もすべて同定し、同定資料数 (NISF) として計数した。

出土貝類遺体のサイズを把握するため、デジタルノギス (Mitsutoyo, CD-P20M) を使用し腹足綱は殻径・殻高、二枚貝綱は殻長・殻高を○・○1mmまで計測した。計測箇所と本稿で使用する部位名称は第5図の通りである。貝製品は破片資料も含め肉眼観察により選別し、デ



第5図ハマグリ部位名称と計測箇所
(川口 1989 に加筆)

ジタルマイクロスコープ (3R-WM401PC2.4GHz, レイアレス顕微鏡・倍率六〇倍) による観察のうえ分類・分析を行った。これらの分析により得られた出土貝類遺体の内容を以下に報告する。
(吉永)

(2) 出土貝類種と組成

既報に記載されている出土貝類種は腹足綱二種、二枚貝綱九種の合計十一種である。本分析では、腹足綱二種、二枚貝綱一種が新たに同定され、出土貝類種は腹足綱四種、二枚貝綱九種、計十三種を数える（第1・2表・第8・9図）。その生息域は、外海岩礁底から内湾湾口砂礫底・干潟砂泥底にわたり、古鶴見湾湾口部という本遺跡の立地を反映しているといえよう。出土点数は一二九七点 (MNI)、破片資料も含めると三二〇四点 (NISF) である。ハマグリが八割以上と主体を占め（第6図）、「ハマグリが九〇%強を占める」という既報の調査所見とも相違ない。

アワビ属

殻頂付近から殻長の中間辺りまでの内唇部が出土した。内唇部のサイズからみて殻長一三〇mmを超える個体に由来するものである。このような大型のアワビが本遺跡周辺で採集可能であったか、外部より持ち込まれたものであるかは検討の余地がある。

ツメタガイ

三点出土している。風化・欠損により殻高の計測は出来なかったが、いずれも殻径四五mm前後の個体であった。

アカニシ

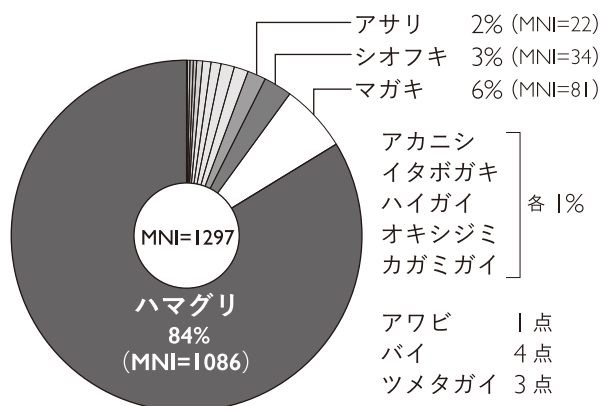
軸唇部のみが四つ、殻高約九五mmの個体が一点、破損箇所があるため正確な計測は出来ないが殻高一〇〇mmを超える個体が二点出土している。体層部には被熱や破損が確認される個体もあり、利用に関わる痕跡である可能性も示唆される。また、体層部上部から中間部が遺存している個体の形質に注目すると、結節がツノ状に尖るツノアカニシと呼ばれるタイプであることが指摘される（第7図）。サザエなどでは生息環境によって形質が変化することが知られているが（富岡一九九九）、アカ

第1表 上台遺跡1号住居址出土貝類種名表

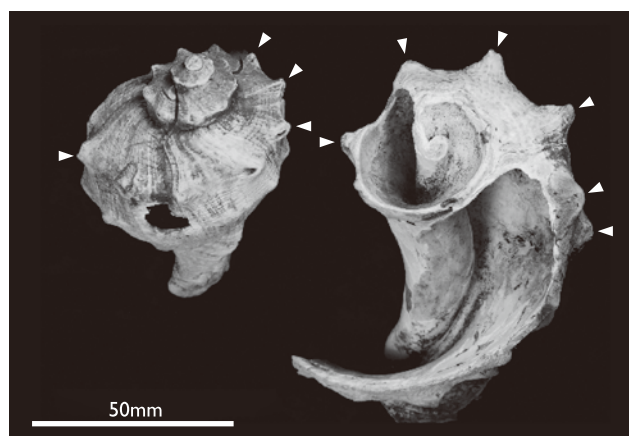
巻貝綱	Gastropoda
アワビ属	<i>Haliotis</i> sp.
ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
バイ	<i>Babylonia japonica</i>
二枚貝綱	Bivalvia
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>
サルボウ	<i>Scapharca kagoshimensis</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
シオフキ	<i>Macra veneriformis</i>

第2表 上台遺跡1号住居址出土貝類一覧表

種名	L	R	破片	MNI	NISP
アワビ				1	1
ツメタガイ				3	3
アカニシ				7	7
バイ				4	4
ハイガイ	12	7		12	19
サルボウ	1	3		4	4
マガキ	81	42	110	81	233
イタボガキ	5	10		10	15
ハマグリ	955	1086	704	1086	2745
オキシジミ	9	9		16	18
カガミガイ	6	13		17	19
アサリ	22	17	16	22	55
シオフキ	34	32	15	34	81
計				1297	3204



第6図 上台遺跡1号住居址出土貝類組成



第7図 結節（矢印部分）が尖るアカニシ

ニシでは形質に影響を与える要因や時期的変化は不明である（黒住耐二氏のご教示による）。東京湾の洪積層出土アカニシから現生アカニシまでを対象とし、結節の形質によって十種類に分類、比較を行った永沢は（一九六〇）、貝塚産および沖積層出土アカニシには結節がツノ状を呈するタイプが多く、棲息深度や塩分濃度との関係性も示唆している。遺跡出土のアカニシの形質については、地域的・時期的な特徴があるのか等、今後注意を払いたい。

バイ

風化・欠損により計測は出来なかったが、殻高六〇mm前後の個体が四点出土している。

ハイガイ・サルボウ・オキシジミ・カガミガイ・アサリ・シオフキ

内湾湾奥部干潟群集であるハイガイが少なく、内湾湾央部砂泥底に生息域をもつ二枚貝が主体を占め、湾口部砂礫底群集であるイタボガキが出土している組成は、古鶴見湾湾口部に形成された本遺跡の立地を反映したものであるといえる。計測、貝合わせの詳細を第3表に示した。

ハマグリ

一〇八六点 (MNI) が出土し本遺跡において主体を占める。既報では出土貝類種にチョウセンハマグリの記事があったため、同定に際し精査したが、すべてハマグリと同定されチョウセンハマグリは確認出来なかった（同定に際し黒住耐二氏にご指導賜った）。チョウセンハマグリが生息域は湾外沿岸砂底であり（富岡一九九九）、現在関東でよく知られている産地は茨城県鹿

第3表 上台遺跡1号住居址出土貝類観察表

ハイガイ

左右	殻 長	殻 高	備 考
L	37.54	33.28	
L	26.22	21.82	
L	23.08	18.55	
L	33.97	28.38	
L	—	28.21	
L	33.63	28.97	
L	40.76	32.48	
L	24.51	20.47	
L	34.14	26.63	
L	27.14	23.03	
R	23.28	20.28	
R	25.28	22.05	
R	—	26.00	
R	—	23.26	
R	—	24.13	
R	29.21	24.44	
L	36.54	29.87	合貝①
R	—	29.63	合貝①
アサリ			
L	42.82	30.73	
L	—	30.20	
L	42.54	33.73	
L	48.55	37.20	
L	45.98	33.41	
L	—	32.01	
L	—	30.01	
L	—	31.29	
L	42.69	31.42	
L	47.50	34.76	
L	45.68	32.56	
L	—	30.79	
L	—	33.70	
L	—	29.36	
R	53.07	42.28	
R	40.01	28.71	
R	—	30.09	
R	—	32.05	
R	42.23	30.20	
R	46.97	32.25	
R	42.96	—	
R	—	32.04	
R	45.07	32.77	
R	—	32.16	
R	—	26.28	
L	43.12	32.94	合貝①
R	43.74	32.78	合貝①
L	47.63	35.91	合貝②
R	47.58	—	合貝②

サルボウ

左右	殻 長	殻 高	備 考
L	59.44	53.28	
R	51.69	43.64	
R	—	38.63	
R	44.08	36.39	
イタボガキ			
L	72.66	100.78	
R	—	67.67	
R	—	98.75	
R	—	87.50	
R	—	96.03	
オキシジミ			
L	42.76	43.19	
L	39.89	43.39	
L	40.01	41.61	
R	—	42.75	
R	—	46.37	
R	45.03	49.89	
R	41.32	—	
R	40.13	40.56	
L	38.90	不可	合貝①
R	38.63	40.39	合貝①
L	34.47	36.53	合貝②
R	34.79	36.76	合貝②
カガミガイ			
L	46.63	—	
L	51.90	—	
L	—	47.11	
R	55.44	52.24	
R	—	54.77	
R	56.90	52.00	
R	—	55.75	
R	52.32	48.69	
R	51.99	47.22	
R	—	44.66	
R	47.96	44.91	
L	46.83	42.99	合貝①
R	46.87	—	合貝①・貝刃
L	53.34	48.37	合貝②
R	53.35	48.81	合貝②

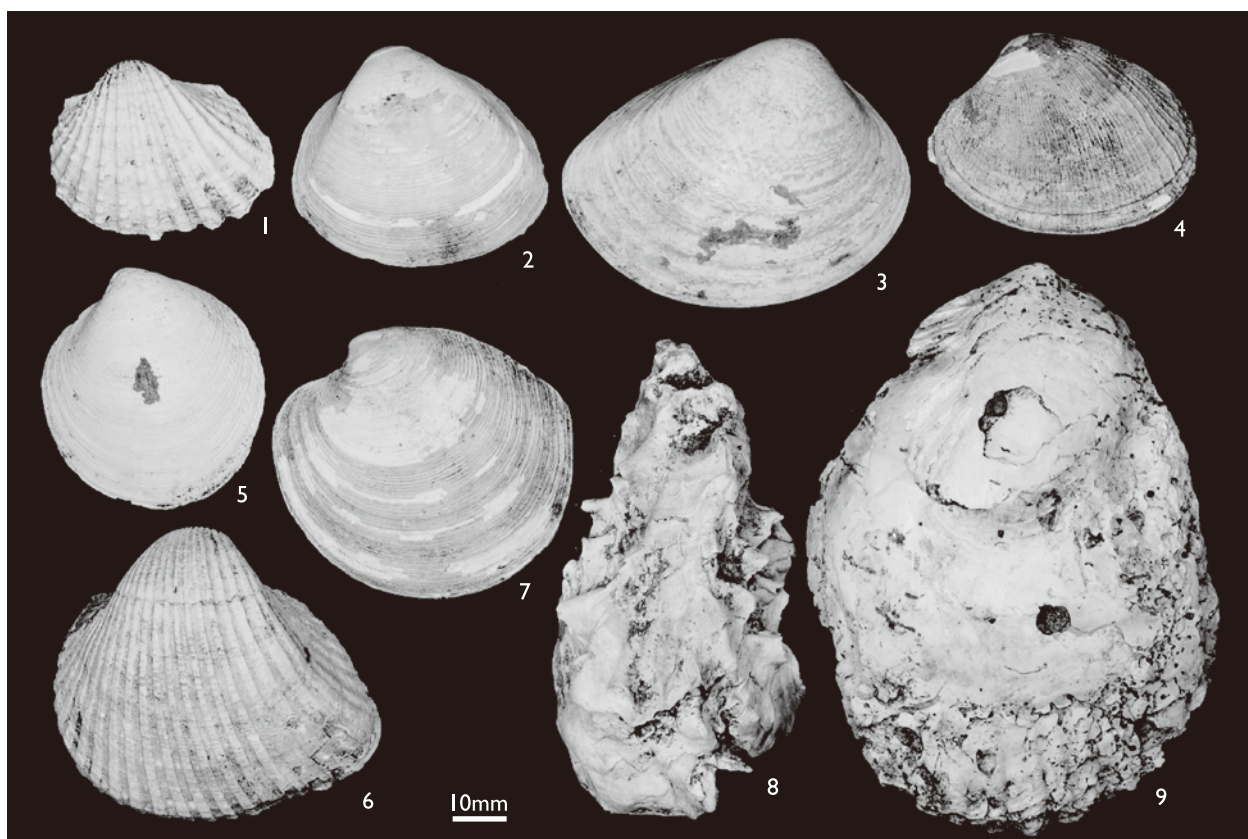
シオフキ

左右	殻 長	殻 高	備 考
L	—	40.57	
L	41.68	—	
L	45.64	39.39	
L	43.62	—	
L	46.86	39.83	
L	41.89	—	
L	—	39.42	
L	45.63	40.48	
L	—	35.67	
L	45.85	41.77	
L	42.13	37.71	
L	—	39.25	
L	42.59	36.88	
L	39.89	—	
L	—	34.74	
L	44.50	—	
L	38.74	35.37	
L	—	36.93	
L	36.86	34.52	
L	—	35.62	
R	51.46	43.40	
R	42.05	37.79	
R	—	39.98	
R	42.43	36.05	
R	42.71	38.47	
R	44.61	39.01	
R	42.34	37.87	
R	44.28	—	
R	44.99	40.96	
R	42.58	36.77	
R	34.26	—	
R	33.50	—	
R	41.46	37.59	
R	43.88	36.10	
R	40.71	—	
R	39.78	36.88	
R	41.64	38.02	
R	44.36	—	
R	40.39	35.18	
R	44.19	37.09	
R	37.80	34.87	
R	—	38.67	
R	42.08	—	
R	—	40.09	
L	44.03	—	合貝①
R	45.24	—	合貝①
L	43.21	36.86	合貝②
R	43.64	36.59	合貝②
L	41.49	36.38	合貝③
R	41.19	36.15	合貝③

*「—」は破損欠損により計測不可であることを示す。計測値の単位はmmである。



第8図 上台遺跡1号住居址出土貝類遺体（腹足綱）
1 アワビ属 2 パイ 3 ツメタガイ 4 アカニシ



第9図 上台遺跡1号住居址出土貝類遺体（二枚貝綱）
1 ハイガイ 2 シオフキ 3 ハマガリ 4 アサリ 5 オキシジミ 6 サルボウ
7 カガミガイ 8 マガキ 9 イタボガキ

島灘や千葉県九十九里浜である。東京湾内湾の西岸域に位置し、さらに入江を呈していた古鶴見湾に立地する本遺跡周辺においては、チョウセンハマグリが生息し採集可能な環境ではなかったと推察される。本遺跡より出土しているとすれば、チョウセンハマグリの生息域である地域より持ち込まれた可能性や、本遺跡周辺にとどまらない広域な採貝領域を考慮する必要がある。しかし、本分析ではチョウセンハマグリの出土は確認できず全てハマグリと同定されたこと、その他に出土している貝類遺体組成から、採貝領域は本遺跡周辺にあり、そこで採集可能であったハマグリを主体的に採集、利用していた貝類資源利用の在り方が想定されよう。

出土したハマグリの殻長分布を第10図に示した。殻長分布の最小値は三二・七二mm、最大値は七四・二四mm、平均値は五二・三〇mmであった。殻長五〇～六〇mm前後の個体が多く出土しており、殻長四〇mmより小型の個体は非常に少なく、また殻長三〇mm以下の個体は見られなかった。「中型以下の個体に限られ、二×三cm大の個体さえ混じっている」という既報の調査所見とは若干異なるようである。殻長五〇～六〇mm台のハマグリが豊富に採集可能であった本遺跡では、採貝活動により得られたハマグリを食料として利用するほか、貝刃などの道具の材料としても積極的に利用していた。貝製品については次項で詳述する。

時間的制約もあり、すべてのハマグリについて徹底した貝合わせ作業を行うことができなかったが、貝合わせを行った結果十三組が合貝となった。また、特異な成長障害をもつ個体が一点出土している(第11図)。(吉永)

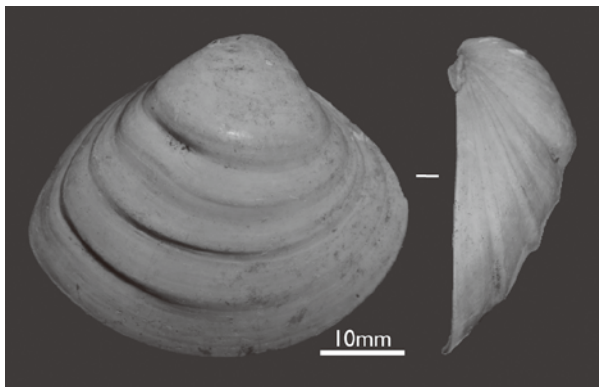
(3) 貝製品

出土貝類遺体には、人為的な加工痕・使用痕が認められる貝製品が含まれていた。出土貝類遺体組成において主体を占めるハマグリを材料とした資料が多く、剥離・打ち欠きにより加工が加えられ使用された貝刃と、著しい磨耗痕が特徴的に観察される磨耗貝器に大別される。出土ハマグリ全体における貝製品の割合は一割であった(第12図)。以下、貝製品毎に詳述する。

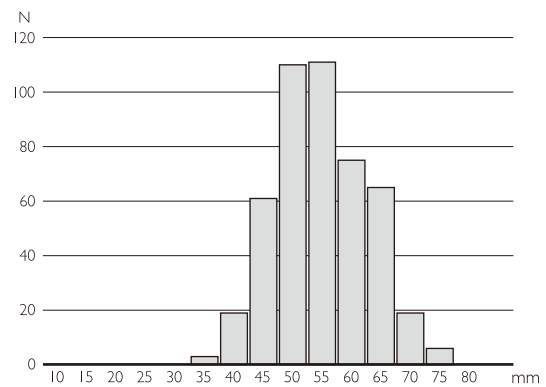
貝刃

ハマグリ製一四四点、カガミガイ製一点の計一四五点が出土した。貝刃は縄文時代を通じ、東京湾岸域をはじめ各地より出土する貝製品としてよく知られる。加工痕・使用痕の認められない出土貝類遺体との区別としては、研究者の共通認識として次のような定義が挙げられるであろう。

「二枚貝の腹縁を加工して刃器として使用した貝製品的一种、二枚



第11図 特異な成長障害をもつハマグリ



第10図 上台遺跡1号住居址出土ハマグリ殻長分布
(加工、使用痕の無い左殻、右殻の計469点)

貝の腹縁を打ち欠き刃を付けた打製刃器、二枚貝縁辺部に押圧による刃部調整を有する骨角器」(神沢・川口一九七一、川口一九八九、宮川二〇〇六)。

このような定義に則るならば、貝刃には様々な加工方法・使用方法と形態が想定され得る。東京湾岸域の縄文時代貝塚出土資料を分析した神沢・川口(一九七二)は、刃の位置と幅により四群八類、加工方法により六型に分類し、貝刃に多様な形態があることを提示した。しかしながら、その後諸遺跡の報告書において貝刃として報告され研究対象となってきたのは、腹縁部に連弧状の剥離を加え波状の刃部を呈する貝製品が大半である。

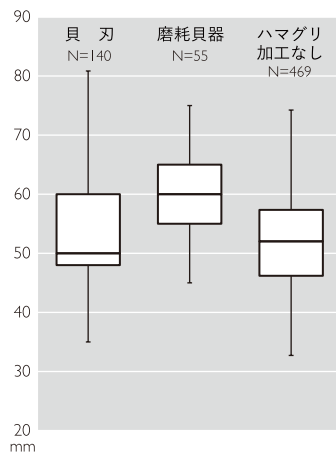
本遺跡出土ハマグリには、一般的に貝刃として認識され報告事例の多い腹縁部に波状の刃部を有する形態の貝刃以外にも様々な形態の貝刃が含まれており、それぞれ刃部や刃の後縁に、加工や使用に伴い生じたであろう刃こぼれ、微少な剥離、磨滅、擦痕、線状痕が観察された。出土貝類遺体は採貝活動から調理、加工、廃棄、埋没、発掘調査といった諸過程を経て様々な営力を受け破損が生じることが考えられるが、本稿では形態や前述した加工痕・使用痕の有無、現生ハマグリを打ち欠いた割れ口との比較検討を行うことで、貝刃とそれ以外の出土貝類遺体の区別を行った。資料全体が風化・磨耗しており観察が十分に行えない資料については対象外とした。なお、貝製品に観察される様々な痕跡は、加工によって生じたものであるのか、使用に伴って生じたものであるのか峻別し難いため、本稿では加工痕・使用痕を併記した。

先行研究における貝刃の分類では、牛沢(一九七七)が千葉県・加曽利貝塚出土資料について行った、腹縁の刃部範囲を角度として捉え計測する分類方法が広く採用されている。しかし、大きな打ち欠きを加え製

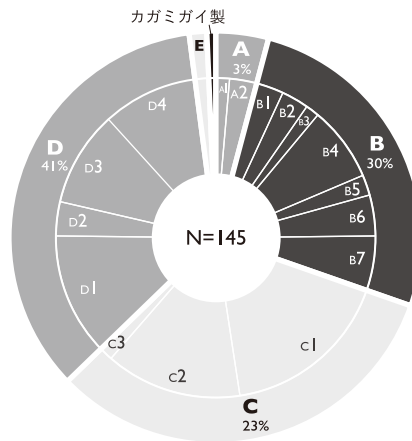
第4表 上台遺跡1号住居址出土ハマグリ製貝刃分類表

加工方法	分類	加工・使用痕が観察される部位と特徴	左 殻	右 殻	該当出土資料No.
剥離	A	腹縁に局所的な剥離（幅10mm前後）を加え刃部とする。	2	3	L 32, 40／R 30, 41, 79
	B	1 前背縁寄りの腹縁部と後背縁寄りの腹縁部。腹縁中央部は未加工、未使用で自然面が残る。	-	4	R 9, 136, 137, 138
		2 腹縁中央部。両背縁および両背縁寄りの腹縁部は未加工、未使用で自然面が残る。	3	3	L 111, 134, 135 ／ R 77, 78, 105
		3 後背縁から腹縁中央部にかけて。前背縁寄りの腹縁～前背縁は未加工、未使用で自然面が残る。	5	-	L 112, 114, 117, 118, 129
		4 前背縁から腹縁中央部にかけて。後背縁寄りの腹縁～後背縁は未加工、未使用で自然面が残る。	2	-	L 22, 26
	5	腹縁全体に加工、使用が及ぶ。 剥離の幅や打ち欠きの奥行は不規則であるため、刃部は様々な形状を呈する。	7	20	L 5, 7, 12, 48, 116, 113, 120 ／ R 6, 16, 18, 20, 21, 25, 28, 87, 122, 123, 125, 126, 127, 128, 130, 131, 132, 133, 139（破片資料）144
連弧状の剥離	C	1 腹縁中央部から前背縁にかけては未加工、未使用で自然面が残る。 1次加工で剥離後、2次加工で等幅の連弧状の剥離を加える。刃の奥行は狭い。	6	8	L 2, 3, 35, 39, 115, 119 R 10, 15, 32, 33, 34, 36, 37, 108
		2 腹縁全体に1次加工で剥離後、2次加工において等幅で規則的な連弧状の剥離を加える。	9	10	L 19, 23, 44, 45, 47, 49, 50, 52, 53 R 27, 42, 43, 46, 51, 54, 55, 56, 57, 58
打ち欠き	D	1 腹縁の一部を深く打ち欠いた部分を刃部とする。	7	11	L 8, 60, 61, 66, 64, 76, 121 R 4, 11, 14, 62, 63, 65, 74, 75, 96, 97, 124
		2 後背縁の突出した部位を欠くような深い打ち欠きや剥離。腹縁中央部～前背縁は未加工。	6	6	L 59, 67, 68, 109, 110, 141 R 1, 12, 13, 38, 106, 107
		3 腹縁全体を打ち欠く。丸形を呈する。	3	1	L 69, 72, 73 ／ R 71
		4 前背縁から後背縁寄りの腹縁にかけて斜めに大きく打ち欠く。幅広い刃部を呈する。	5	9	L 91, 92, 93, 94, 140 R 96, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 143
		5 両背縁から背面の中央部に向けて大きく打ち欠く。殻頂付近のみが残るため菱形を呈する。	5	7	L 7, 80, 81, 82, 83 R 70, 84, 86, 85, 88, 89, 90
打ち欠き＋剥離	E	殻頂部から腹縁にかけて垂直に半裁した破断面を刃部とする。	2	-	L 17, 29

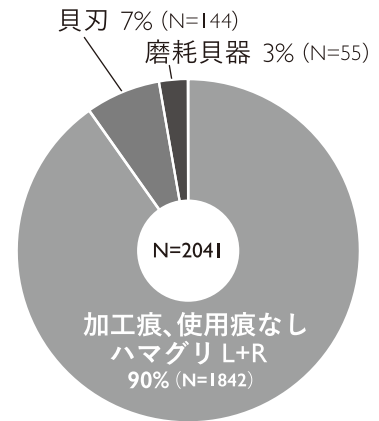
62 82 合計 144 点



第 14 図 上台遺跡 1 号住居址出土
貝製品殻長分布



第 13 図 上台遺跡 1 号住居址出土貝刀
分類の組成



第 12 図 上台遺跡 1 号住居址出土
ハマグリにおける貝製品の
割合

作されている資料群など本遺跡出土資料に観察される加工痕・使用痕は先の分類方法では捉えきれないことから、独自の分類を試みた。

加工痕・使用痕の観察に先立ち、現生ハマグリと破損箇所のある本遺跡出土ハマグリの破断面の観察を行った（第 15・16 図）。観察に使用した現生ハマグリは、本遺跡より多く出土している殻長五〇～六〇mm 台のハマグリ、また殻長七〇～八〇mm 台のハマグリは購入による入手が出来なかったため、チョウセンハマグリをそれぞれ筆者が鮮魚店で購入したものである。現生ハマグリについては、鶏卵大のハンマーストーンで内面から腹縁縁辺部に打撃を加え、破断面を観察した。本遺跡出土ハマグリについては、破損箇所があるものの加工痕・使用痕が見られない破砕貝の破断面

を観察した。

観察の結果、貝刃において刃の後縁に該当する箇所は、成長線に沿うような平滑でなだらかな破断面を呈していた。貝刃において刃先に該当する箇所も同様に平滑な破断面を呈し、鋭く明瞭な角が立つ。これらの破断面の特徴は、貝刃の刃の後縁・刃先には見られないものである。剥離・打ち欠きを加える貝刃製作の過程で破断面は平滑ではなくなり、使用により鋭く立つ角は磨滅し消失するのであろう。先行研究において貝刃に度々観察されてきた剥離・磨滅・線状痕・擦痕は人為的な加工・使用の結果生じる可能性が指摘され、貝刃と破砕貝を区別する項目として有用であると考えられる。

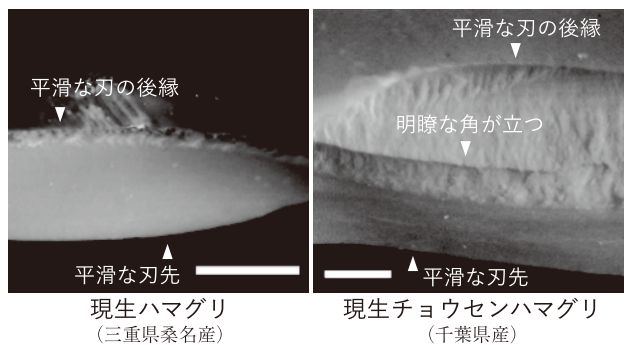
貝刃は、主に剥離によって加工が加えられている A・B・C タイプ、主に打ち欠きによって加工が加えられている D・E タイプに大別し、加工痕・使用痕が観察される範囲や形態によって細分した。各タイプの特徴は以下の通りである（第 4 表、第 17・18・19 図）。

A タイプ…局所的な加工痕（剥離）・使用痕が認められるもの。腹縁に幅一〇mm 前後の局所的な剥離を加え刃部としている。刃部の幅は非常に狭いが、同幅の連弧状の剥離や刃先の磨滅、線状痕といった加工痕・使用痕が明瞭に認められる。

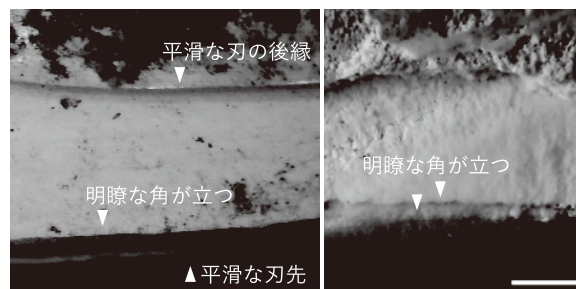
B タイプ…前背縁から後背縁にかけて主に剥離による加工痕・使用痕が認められるもの。加工痕・使用痕の認められる範囲により以下の 5 タイプに細分される。

B1 タイプ…前背縁寄りの腹縁部と後背縁寄りの腹縁部に加工痕・使用痕が認められる。腹縁中央部は未加工・未使用で自然面が残る。

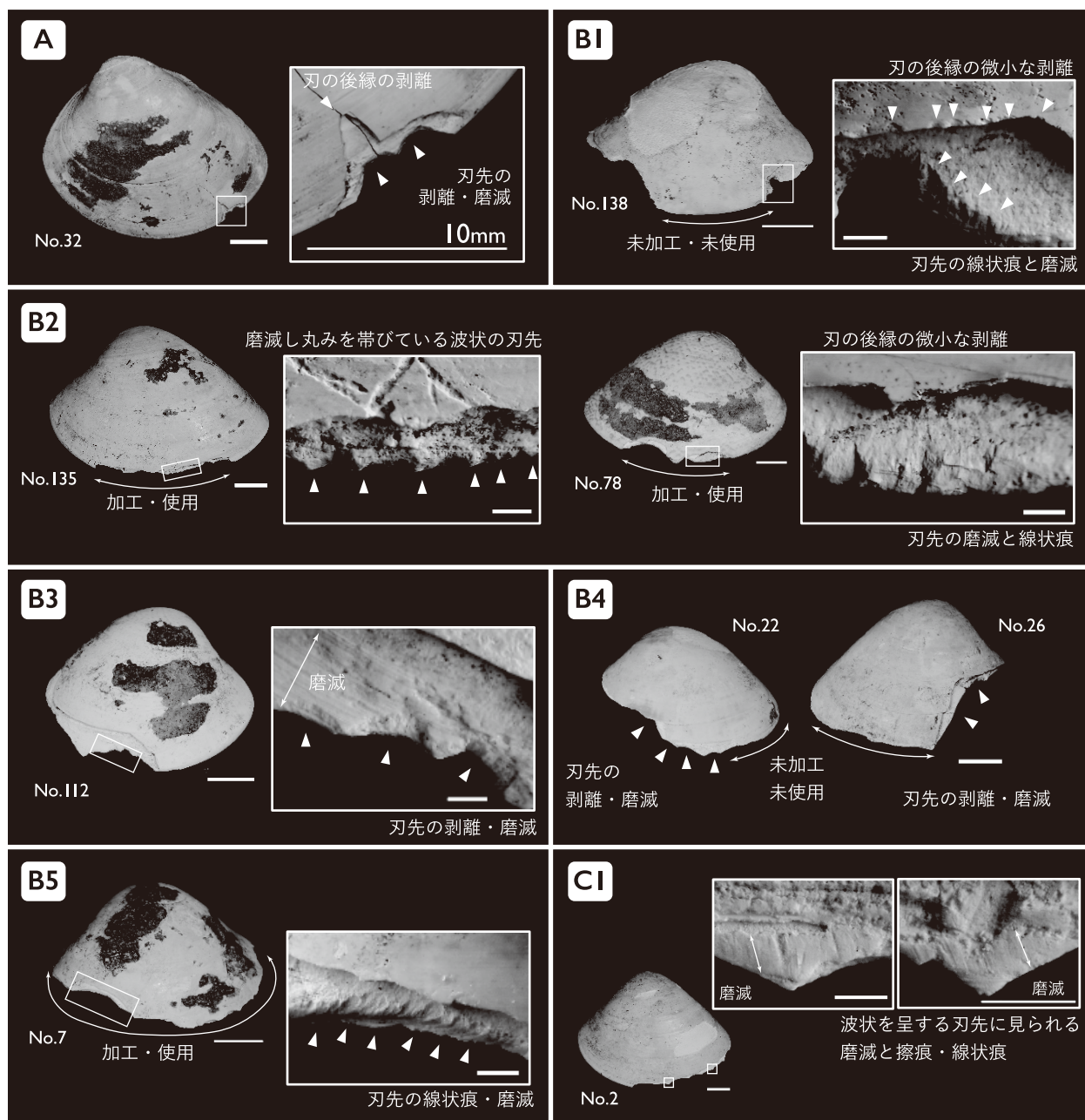
B2 タイプ…腹縁中央部に加工痕・使用痕が認められる。両背縁および両背縁寄りの腹縁部は未加工・未使用であり自然面が残る。



第15図 現生ハマグリの割れ口

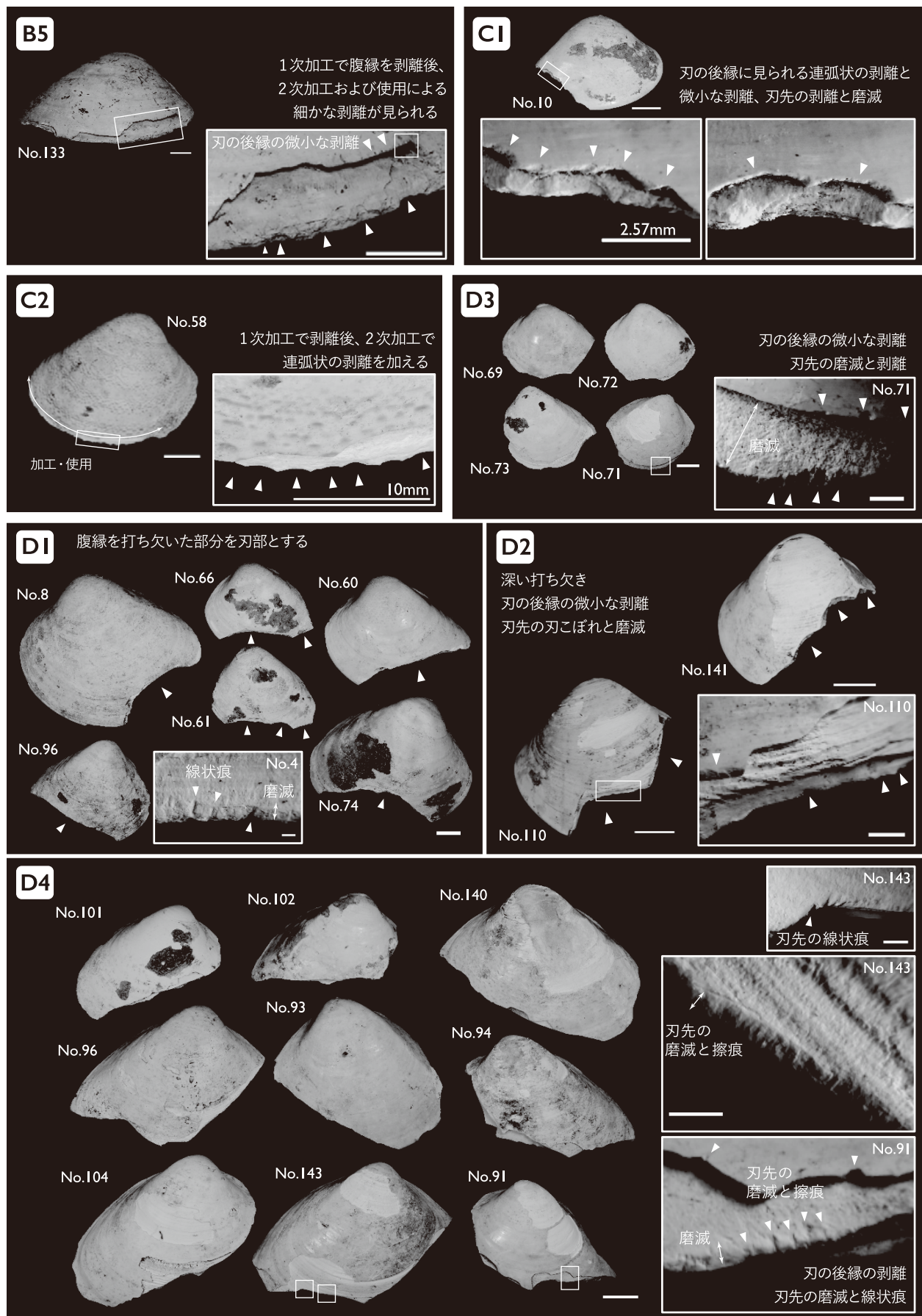


第16図 加工痕・使用痕の見られない出土ハマグリの割れ口

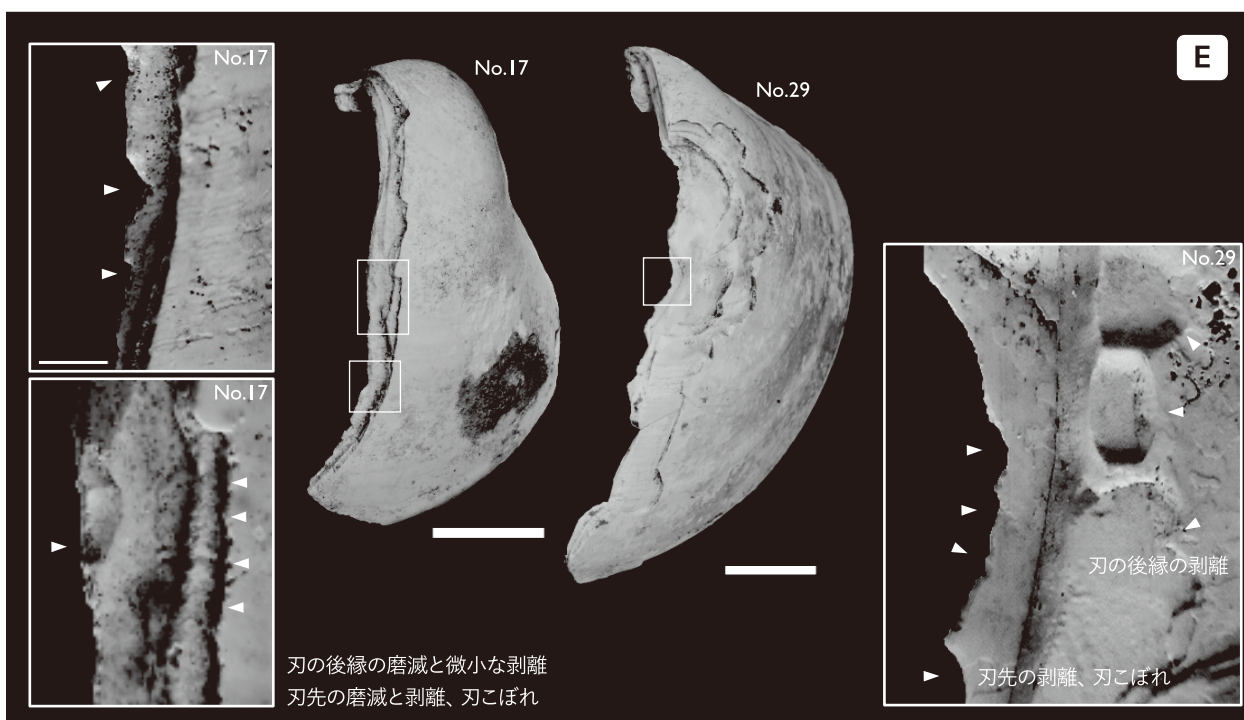
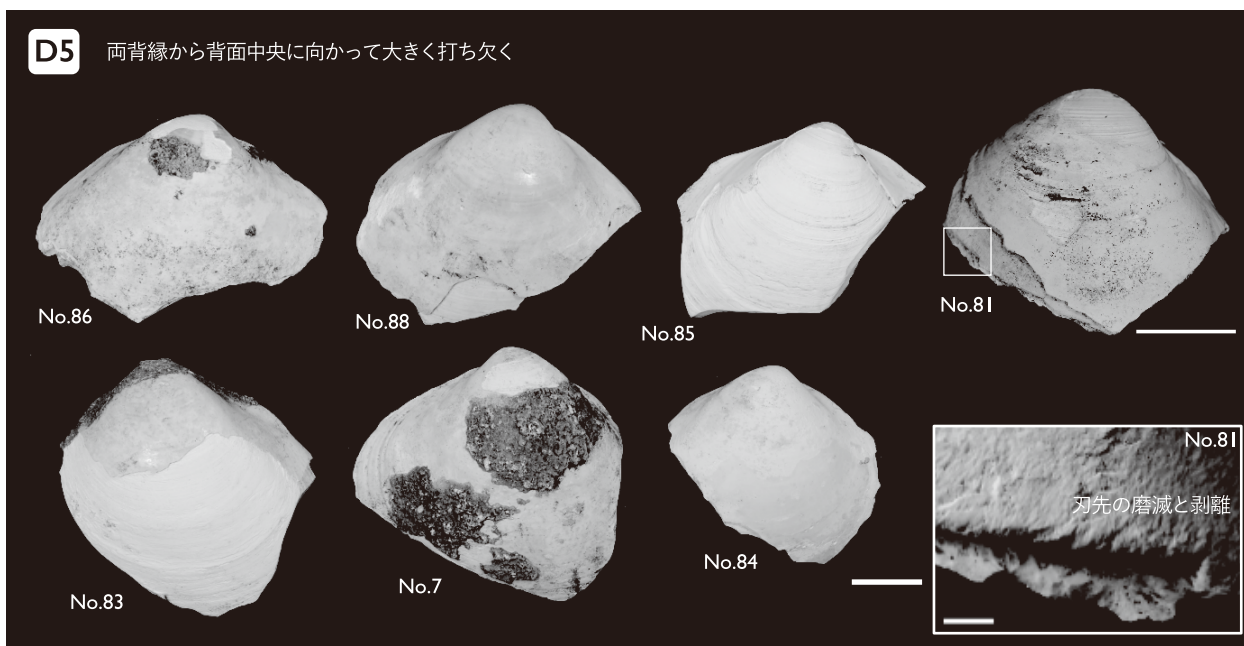


第17図 上台遺跡1号住居址出土ハマグリ製貝刃の分類と加工痕・使用痕(1)

資料No. は第4表と対応する。貝刃右下スケールは10mm、拡大写真内スケールは数値の記載がないものは1mmを示す。



第 18 図 上台遺跡 1 号住居址出土ハマグリ製貝刃の分類と加工痕・使用痕 (2)
資料 No. は第 4 表と対応する。貝刃右下スケールは 10mm、拡大写真内スケールは数値の記載がないものは 1mm を示す。



第 19 図 上台遺跡 1 号住居址出土ハマグリ製貝刃の分類と加工痕・使用痕 (3)
資料 No. は第 4 表と対応する。貝刃右下スケールは 10mm、拡大写真内スケールは 1mm を示す。

C
タイプ…前背縁から後背縁
にかけて主に連弧

に差がみられる。
おり、左右の出土数
殻が多く出土して
な形態を呈する。右

るため刃部は様々
奥行は不規則であ
離や打ち欠きの幅・
使用痕がおよぶ。剥

B5
タイプ…腹縁全体に加工痕・

使用痕が認められ
は未加工で自然面
が残る。

ら後背縁にかけて
れる。腹縁中央部か
は未加工で自然面
が残る。

B4
タイプ…前背縁から腹縁中

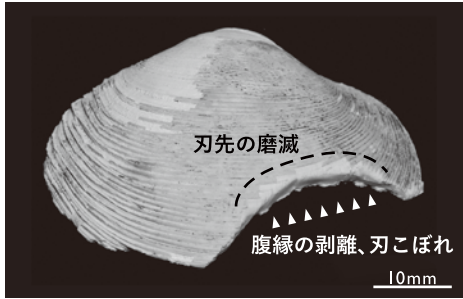
央部の範囲に加工
痕・使用痕が認めら
れる。前背縁寄りの

腹縁前背縁は未加
工・未使用で自然面
が残る。

痕・使用痕が認めら
れる。前背縁寄りの

B3
タイプ…後背縁から腹縁中

央部の範囲に加工
痕・使用痕が認めら
れる。前背縁寄りの



第20図 上台遺跡1号住居址出土
カガミガイ製貝刃

状の剥離による加工痕・使用痕が認められるもの。加工痕・使用痕の認められる範囲により以下の2タイプに細分される。

C1タイプ…腹縁中央部から后背縁の範囲は未加工・未使用で自然面が残る。一次加工で腹縁を剥離後、二次加工で連弧状の細かい剥離を加えて刃部を製作している。刃部は波状を呈し刃の奥行は狭い。

C2タイプ…C1と同様の加工方法と波状の刃部が見られるが、加工痕・使用痕の範囲がより広く腹縁全体におよぶ点異なる。

Dタイプ…后背縁から后背縁にかけて主に打ち欠きによる加工痕・使用痕が認められるもの。加工痕・使用痕が認められる範囲と形態により以下の5タイプに細分される。

D1タイプ…腹縁から殻の中央部に向かって、腹縁の一部を深く打ち欠いた部分を刃部とする。一点出土しているカガミガイ製貝刃も本タイプに該当する(第20図)。

D2タイプ…后背縁寄りの腹縁から后背縁にかけて打ち欠きや剥離が見られ、殻が突出している部分を除くような形態を呈する。前

背縁から腹縁中央部は未加工・未使用であり自然面が残る。

D3タイプ…腹縁全体を深く打ち欠き、殻頂部周辺を残し丸形を呈する。

D4タイプ…后背縁から后背縁寄りの腹縁にかけて、斜めに大きく打

ち欠く。幅が広く直線的な刃部を呈する。

D5タイプ…両背縁から背面の中央に向けて斜めに大きく打ち欠く。D4タイプにさらに後背面からの打ち欠きを加えたタイプとも捉えられる。殻頂部周辺のみが残り菱形を呈する。

Eタイプ…殻頂部から腹縁にかけて、垂直に半裁した形態を呈し、その破断面を刃部とする。刃部には著しい剥離や線状痕が見られる。

先行研究では貝刃の材料となった貝種また形態の割合について、加工方法・機能・用途との関連という視点から遺跡毎に分析が行われてきた。本遺跡出土貝刃分類の組成は第13図の通りである。貝種は、カガミガイ製貝刃一点を除きすべてハマグリ製であった。加工方法と加工・使用部位の組み合わせによって細分されるが、剥離による加工を特徴とするA・Bタイプは三三%、一次加工後、二次加工で連弧状の剥離を加えるCタイプは二三%、打ち欠きによる加工を特徴とするD・Eタイプは四四%(カガミガイ製貝刃を含む)であった。特定の加工方法や形態が主体を占める傾向はみられず、一つのタイプに偏らない多様な貝刃のあり方がうかがえる。また、報告例がほとんど見られないD・Eタイプ、即ち大きな打ち欠きによる加工と幅の広い刃部を特徴とするタイプが一定の割合を占める点は、本遺跡の特徴として指摘されよう。神沢・川口(一九七一)、川口(一九八九)によれば、これら大きな打ち欠きを加えるタイプの貝刃は、刃部としての形状、使用による損耗が認められるにも関わらず単なる破砕貝として見なされ易く、出土例が非常に少ないと指摘されている。

貝刃を含む貝製品と、貝製品以外の出土ハマグリを比較するため、殻長の計測を行い第14図に殻長分布を示した。貝刃の材料として

加工・使用痕の見られるハマグリは殻長約五〇～六〇mmであった。加工・使用痕の見られない出土ハマグリよりはやや大きいサイズが選択されているものの、その分布はほぼ重なっている。大型個体への選択性は見られず、加工痕・使用痕が見られない殻長約七〇mm以上の大型個体も散見される。本遺跡で多く出土している殻長約五〇～六〇mmの中型個体が貝刃の材料としても主に利用されていたことが指摘される。ハマグリのサイズが大型になるほど殻の厚みも増すことから、中型個体の入手と加工のし易さが殻長分布に反映されている可能性も考えられる。

磨耗貝器

すべてハマグリ製であり五十五点が出土した。磨耗貝器としたハマグリは、背面の模様が肉眼観察可能であるような遺存状態が良好な個体であるにも関わらず、部分的に著しい磨耗痕が認められる資料群である。金子・忍沢（一九八六）では「ヘラ状貝製品」、川口（一九八九）では「磨耗貝器」として分類されている貝製品であり（第21図）、次のような特徴が指摘されている。

（一）器体の一部に磨耗痕、研磨痕、擦痕を有する。
（二）明瞭な加工痕が認められず、貝の有する自然形をそのまま利用したものがほとんどである。

（三）より厚さのある大型の貝への選択性が認められる。

（四）土器の器面調整、皮なめし等幅広い用途を有していたと考えられる。

また、貝刃や貝輪といった出土貝製品と比べて磨耗貝器の出土報告例は少なく、その要因としては次のような指摘がなされている（金子・忍沢一九八六、川口・一九八九）。

（二）研究者側の認識不足である可能性があり、より一層の遺物への注意力が必要である。

第5表 上台遺跡1号住居址出土磨耗貝器分類表

著しく磨耗している箇所と形態の特徴	左殻	右殻	該当出土資料No.
殻頂部、菌丘部、殻頂部は磨耗により孔が開く	1	-	L 2
殻頂部欠損、前背縁から後背縁にかけての縁辺の割れ口と背面が磨耗	-	2	R 7, 17
殻頂部欠損、殻頂・前背縁・背面が磨耗	-	2	R 3, 33
菌丘、前背縁から腹縁にかけて縁辺の背面が磨耗	-	1	R 32
菌丘、前背縁から腹縁にかけて縁辺の内面が磨耗	-	2	R 19, 34
前背縁から腹縁にかけて斜めに欠損、割れ口と内面が磨耗	-	1	R 55
後背縁から腹縁にかけて斜めに欠損、割れ口が磨耗	1	-	L 56
前背縁側欠損、半裁 割れ口、背面が磨耗	7	4	L 9, 10, 23, 24, 50, 52, 53 / R 18, 20, 31, 35
前背縁側欠損、半裁 割れ口、内面が磨耗	4	-	L 8, 21, 22, 26
後背縁側欠損、半裁 割れ口が磨耗	1	1	L16 R 46
後背縁側欠損、半裁 割れ口、背面が磨耗	2	14	L 5, 6 R 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 47, 48, 49, 51, 54
後背縁側欠損、半裁 割れ口、内面が磨耗	-	3	R 12, 14, 30
殻頂部欠損、殻頂から後背縁にかけて直線的に磨耗	3	1	L 4, 11, 15 R 13
殻頂部欠損、殻頂から前背縁にかけて直線的に磨耗	2	-	L 25, 28
腹縁割れ口全体が磨耗	-	1	R 36
腹縁の内面全体が磨耗	1	-	L 1
腹縁側から深く打ち欠いた割れ口と背面が磨耗	1	-	L 29
23 32			合計55点

加曽利北貝塚（千葉県）出土
アリソガイ製磨耗貝器〔縄文中期・加曽利 E 式期〕

No. 2: 殻頂部が著しく磨耗しており孔が開いている
内面の歯丘全体も著しく磨耗しており、矢印部分のように歯が平らに削られるような磨耗が観察される

No. 7, 17: 前背縁から後背縁にかけて磨耗が著しい
殻の最も厚い箇所であるが激しい磨耗により殻頂部を欠いている
磨耗は断面だけでなく背面にもおよんでいる

No. 31, 51, 28: 磨耗箇所

腹縁全体にわたって内面が著しく磨耗している
背面には磨耗は全く認められないことから、内面を下に伏せるような使用が推察される
矢印部分には擦痕が観察される

– 97 –

(二) 一見、自然遺物との区別が困難である。

(三) 食料残渣として扱われてしまうことで、実数は出土例をかなり上回る可能性がある。

本遺跡出土資料ではへう状を呈する形態の資料は見られず、著しい磨耗の痕跡が特徴的であることから川口（一九八九）にならい「磨耗貝器」として報告する。著しい磨耗痕を有する部位毎に出土資料を一覧したものが第5表である。いずれの磨耗貝器も、殻が最も厚い殻頂部付近を含んでいながら著しく磨耗しており、資料によつては背面や内面にも削りこまれるように磨耗がおよんでいる。擦痕が観察される資料もあった。磨耗貝器にみられる著しい磨耗痕は局所的であり、貝殻全体が風化により磨滅・磨耗している資料とは明らかに異なる（第22図）。磨耗貝器の殻長分布は、殻長約五五～六五mmに集中する。大型個体への選択性がうかがえ、先行研究の指摘を追認する結果であった（第14図）。

有孔貝器

ハマグリ製一点が出土している。川口（一九八九）によると、有孔貝器とは「自然の殻形は保ちつつ、二枚貝や巻貝の殻頂部および体層部に粗雑な小孔を穿つもの」と定義されている。本資料も殻頂部の孔に拡張や研磨は認められず、内面からの穿孔以上の加工は施されていない点から有孔貝器と分類した。ただし、本資料は縁辺に目を向けると、後背縁から腹縁にかけて加工・使用された痕跡が認められ、第4表ではD2タイプに分類される貝刃でもある。

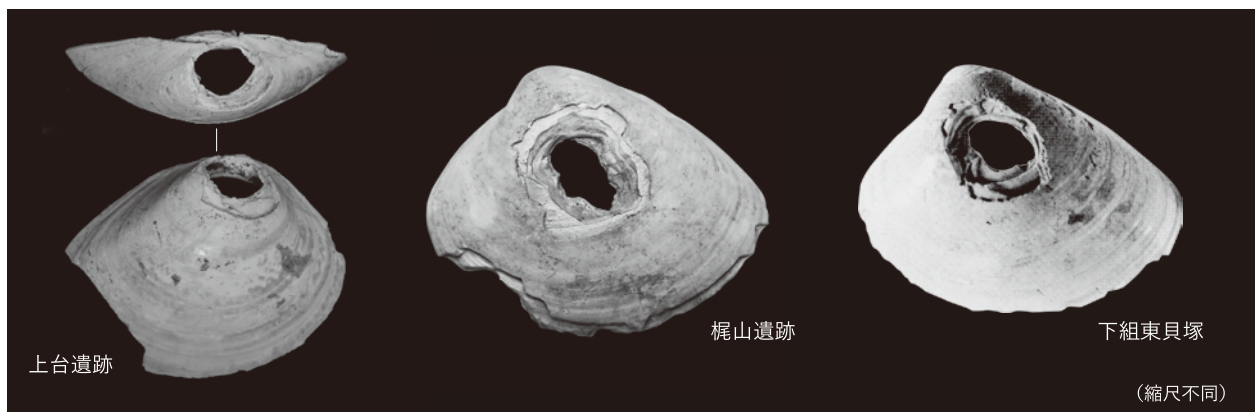
本資料と類似した有孔貝器は、本遺跡より直線距離にしてそれぞれ約一～三km程度の位置に形成された梶山貝塚（第1図・前期花積下層式期）から一点、下組東貝塚（前期花積下層式期）から四点報告例がある（第23図）。いずれも腹縁に加工痕・使用痕を有し、貝刃としての形態も呈す

る点は本資料と共通する。下組東貝塚では有孔貝器ではなく「貝刃」として報告されており、穿孔は「紐掛け用」の孔としての機能が推測されている（玉川文化研究所編二〇〇六）。

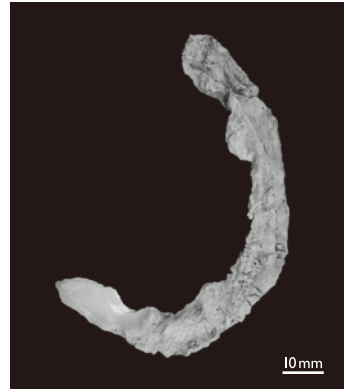
時期・地域は異なるが、東京湾東岸域にあたる千葉県・加曽利北貝塚（居住址地域・加曽利EⅡ式期）からも一点報告例をみることができる。ただし、穿孔以外に加工痕・使用痕は認められず、貝刃としての形態を呈していない点は本資料や梶山貝塚、下組東貝塚出土資料と異なる。

貝輪

イタボガキ製一点が出土している（第24図）。貝輪は縄文時代を通じて各地から出土する貝製品であり、材料となる貝種は様々である。本資料は全体の三分の一程度が欠損しているが、孔が開けられ縁辺が等幅となっている形態から貝輪と分類した。背面および内面、断面に研磨は認められず、未製品か



第23図 上台遺跡1号住居址および他遺跡出土ハマグリ製有孔貝器



第24図 上台遺跡1号住居址出土
イタボガキ製貝輪

製品であるかの区別は判然としない。材料となつてゐるイタボガキは左殻五点・右殻一〇点が出土しており、左右で出土数に差異が認められた。本資料は右殻が利用されており、出土数の左右差は貝輪製作に関連する可能性も考え得る。
(吉永)

まとめ

古鶴見湾では、縄文時代前期・花積下層式期に学史的に著名な菊名貝塚や下組東貝塚をはじめとした斜面貝塚が形成され始める。貝類遺体は勿論のこと、多くの魚類遺体と釣針などの漁撈具の出土は、生業活動の一端に活発な漁撈活動と海産資源利用がうかがえるものである。しかしながら、関山式期に入ると、貝塚だけでなく遺跡の分布そのものが空白となり、貝塚は白幡浦島ヶ丘遺跡の土坑内貝層以外に見つかっていない。本遺跡が形成された黒浜式期に入り、湾口部や湾奥部で貝塚を含む集落遺跡が再び形成され始め、続く諸磯a・b式期に継続する茅ヶ崎貝塚や西ノ谷貝塚といった環状を呈する集落も形成されるようになる。このように数多くの貝塚が形成されている一方、出土動物遺体の詳細な分析や定量的内容が明らかとなつてゐる貝塚は断片的であり、当該地域の採貝・漁撈・狩猟活動と動物資源利用の考察を行う上では課題が多く残されている。本稿では、古鶴見湾において遺跡数が増加し始める黒浜式期に形成された本遺跡の出土貝類遺体の分析を行うことで、本遺跡周辺を採貝

活動領域としてハマグリを主体的に採貝していた生業活動の一端と、多様な形態の貝刃を中心とする貝製品の出土から、食料としての利用だけでなく道具の材料として積極的に利用していた貝類資源利用のあり方を明らかにすることができた。

本遺跡の調査時および本分析においても貝類遺体以外の動物遺体が確認されなかった点は、本遺跡に限らず東京湾岸域の当該期住居址内貝塚にみられる動物遺体の出土傾向として指摘されており(植月・小島二〇〇〇、忍沢二〇〇一・二〇〇三)、当該期の動物資源利用・廃棄行動に関連するものとして注視したい。本遺跡では貝製品のまとまった出土も鑑み、単なる食料残滓の廃棄場にとどまらない可能性も示唆される。

貝刃については近年、製作方法に迫る詳細な観察分析(山崎・黒住・大城二〇一四)、弓・矢柄製作の加工具、赤色顔料製作に関連した可能性の指摘など(山崎二〇一〇)、先学により指摘されてきた製作・機能・用途の时期的・地域的特徴が詳細に提示される論考が出されている。本遺跡出土の多様な貝刃もその一事例として捉えることができ、貝刃の材料として選択されている殻長五〇～六〇mm台のハマグリが入手可能であった環境的要因を背景として、金子・忍沢(一九八六)が指摘しているように、用途の広汎性とそれに対応可能な製作加工の簡便性が相俟つて重要な道具のひとつとして位置付けられていたと推察される。多様な形態の貝刃は様々な機能・用途を持っていたことが想定され、石器等の共伴する遺物の検討、本分析で観察された種々の痕跡の実験考古学的な検討も今後必要である。

本遺跡出土貝刃のあり方は、一遺跡から一〇〇点以上確認された点、他遺跡では報告例がほとんど見られない大きな打ち欠きによる加工方法によって製作された資料群、有孔貝器の出土という点において、本遺跡か

ら近距離に形成された梶山貝塚と共通性を見出すことができた。一方で、形成された時期の違い、住居址内貝塚と斜面貝塚の違い、磨耗貝器を伴う点においては差異も指摘される。

本稿で報告した内容も含め、縄文時代の古鶴見湾岸地域における生業活動と動物資源利用を明らかにしていくには、当該地域における出土動物遺体の再検討と定量的内容の集成に努め、採貝・漁撈・狩猟活動のあり方と動物資源利用の通時的な比較検討、さらに奥東京湾や東京湾東岸域といった近隣地域との比較検討も今後の課題として残されている。

(吉永)

謝辞

本稿をまとめるにあたり、川口徳治朗氏、黒住耐二氏、平澤悠氏にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- 植月 学・小島秀彰 二〇〇〇「縄文前期の生業と居住形態―千葉県唐塚遺跡の生業活動とその季節性―」『古代』第一〇八号 早稲田大学考古学会
牛沢百合子 一九七七「骨・角・牙・貝製品」『加曾利貝塚Ⅳ』滝口宏編 中央公論美術出版
忍沢成視 二〇〇一「横浜市茅ヶ崎貝塚の貝層」『茅ヶ崎貝塚―貝塚編―』財団法人横浜市ふるさと歴史財団
忍沢成視 二〇〇三「西ノ谷貝塚J57号住居跡内貝塚の調査」『西ノ谷貝塚』財団法人横浜市ふるさと歴史財団
神奈川県立生命の星・地球博物館編 二〇〇四「企画展 12℃の世界 ワークテキスト」神奈川県立生命の星・地球博物館
神奈川県立博物館編 一九七七「神奈川県立博物館発掘調査報告書 第十号 梶山遺跡(四) 上台遺跡(予報)」神奈川県立博物館

神奈川県立博物館編 一九七九「神奈川県立博物館発掘調査報告書 第十一号 上台遺跡」神奈川県立博物館

上台遺跡調査団編 一九九九「上台遺跡発掘調査報告」上台遺跡調査団

金子浩昌・忍沢成視 一九八六「骨角器の研究 縄文篇Ⅰ・Ⅱ」慶友社

川口徳治朗 一九八九「縄文時代貝塚出土の貝製品に関する用途的研究」『昭和六十三年度科研費補助金(一般研究C)研究成果報告書』

神沢勇一・川口徳治朗 一九七一「東京湾沿岸域出土の貝刃について」『神奈川県立博物館研究報告』第一巻第四号 神奈川県立博物館

工藤雄一郎 二〇一二「旧石器・縄文時代の環境文化史―高精度放射性炭素年代測定と考古学―」新泉社

杉原莊介編 一九七七「加曾利北貝塚」中央公論美術出版

玉川文化財研究所編 二〇〇七「上台遺跡(上末吉一丁目九五四番地一所在) 発掘調査報告書」玉川文化財研究所

玉川文化財研究所編 二〇〇六「横浜市港北区 下組東貝塚 発掘調査報告書」玉川文化財研究所

富岡直人 一九九九「貝類」『考古学と動物学』西本豊弘・松井章編 同成社

永沢譲次 一九六〇「房総半島の洪積層に於けるアカニシの変異に就いて」『東北大学理科学報告 地質学 四』東北大学

宮川博司 二〇〇六「縄文時代における貝刃の様相とその機能論的考察」『考古学論究』第十一号 立正大学考古学会編

山崎純男 二〇一〇「大分県中津市本耶馬溪洞穴出土の貝刃について」『先史学：考古学論究Ⅴ 上巻 甲元眞之先生退任記念』龍田考古会編

山崎真治・黒住耐二・大城秀子 二〇一四「沖縄県南城市熱田原貝塚出土貝刃の製作技術」『日本考古学』第三十八号 日本考古学協会